

自灯学寮寮監 田端 彩子(『真宗』2015年5月号掲載)

自灯学寮では、起床時間や掃除、勤行、門限、消灯時間などの規則を守りながら生活しています。貫練学寮との合同懇親会や合同一泊研修、寮内講演会や学園祭、報恩講などの行事もあります。ある寮内講演会で先生の「友達をつくるものではなく、なるものです。違いを認め合うということです」という言葉は、とても胸に響きました。まさに学寮とは生活を通して、人それぞれ違うということを教えてもらえる場、自分自身をも教えてもらえる場だと思います。残り1年寮監としての生活を通して、学寮の大切さと楽しさを寮生とともに感じていきたいです。



貫練学寮寮監 井野 了慧(『真宗』2015年6月号掲載)

貫練は寮生20人とスタッフ4人が暮らしています。朝夕の勤行や声明講習、報恩講などの行事を通して実践的に作法を身につけると共に、他者との関わりの中で自分を見つめることが寮生活の真骨頂だと思います。常に顔をつき合やす生活環境では、自身に被せた仮面はすぐはがれ落ちます。自分勝手な考えは通用しないので、時に衝突もします。本音同士の交流だからこそ、寮で育まれた絆は深く長いでしょう。スタッフにとっても、思わぬことに気づき、反省もさせられる大切な場です。残り少ない寮生活ですが、体当たりで寮生たちとともに学んでいきたいです。



自灯学寮寮監 稲岡 智子(『真宗』2015年7月号掲載)

これまで「寮生」「残留」「寮監」という3つの立場を経験してきました。寮生・残留委員だった時の学寮は、授業、部活、行事や人間関係など様々なことに全力で取り組み、悩み楽しめる場でした。そして今年、7年ぶりに寮監として戻ってきたのですが、立場が変わったことで、生活する上での意識や見える世界が全く異なります。特にもう一人の寮監と寮に関する細かい情報を共有し、また自身の言動を律する必要性があるところです。寮監を経験し始めたところですが、今でもこの自灯学寮という「場」に育てられていると実感しています。



貫練学寮残留委員 二所宮 岳(『真宗』2015年8月号掲載)

昨年は寮生として過ごし、今年から学寮の残留委員になりました。2月に卒寮して3月末から改めて入寮したのですが、この短期間で学寮に対する見方が一変しました。寮生の頃は寮則を守る事を重要視していたのですが、残留委員になった途端、指導する事が増え、また寮監と寮生との間に立ったり、寮生のフォローに回る場面も出てきました。一つひとつに気を張るのですが、他者の心を聞きとる力が養われていると感じています。学寮にもう1年携われるので、寮生たちとの学びを通じて、何物にも代えがたい力を身につけていきたいです。



自灯学寮寮生 武田 真美(『真宗』2015年9月号掲載)

自灯学寮に入ってから約半年が過ぎました。寮生活にも慣れてきて、まるで第二の実家のようになっています。オーディオルームという、テレビなどが置かれている部屋があるのですが、そこで録音番組や借りてきた映画をみんなで見たり、エクササイズを大人数で出来るというのは学寮ならではの生活ではないかと思います。最近は何人かでオーディオルームにおいてある新聞のチラシを見て、安かったスーパーや、美味しそうなケーキ屋さんに行ってきました。家族が沢山増えたような感じがして、新しい考え方や習慣を見つけることが出来るのが学寮の良い所だと思います。



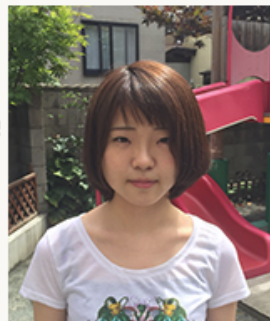
貫練学寮寮生 河野 一道(『真宗』2015年10月号掲載)

今春より故郷を離れ、貫練学寮で新生活を始めました。私自身、得度を受けた時から大谷大学に入学した現在まで、自坊を継ぎ、支えたいという夢を一直線に抱き続けています。父も30年程前、同じく貫練学寮の寮生でした。息子として少し複雑な心境ですが、昔の父と同じ生活をしている安心感もあります。父と学寮の話をする、当時と今の違いがわかり、また相談できるのは心強いです。勿論、学寮の歴史は親子関係だけでなく、多くの方々のご縁の中で育まれてきたものです。ここで得た出遇いに感謝しながら、一日一日を丁寧に過ごしていきたいです。



自灯学寮寮生 照井 寿美加(『真宗』2015年11月号掲載)

私が所属する真宗学科には女性が少ないと聞いていたので、他学科の人とも交流したいと思い入寮しました。期待通り、色んな学科の友達ができえました。ほぼ寺院出身ではない友達と生活する中で、お寺独自の行事や読経など、当たり前だったことが全く通じないことに気づきました。夏休みの閉寮時に帰省して、なぜ通じないかを考えて過ごしたのですが、そこで始めて「お寺」に向きあったように思いました。残り半年、色んな学寮行事が控えています。多くの「気づき」を与えてくれる友達と協力しながら親睦を深め、卒業しても一生続く関係を築いていきたいです。



貫練学寮寮生 青矢 大宗(『真宗』2015年12月号掲載)

貫練学寮に入った最大の理由は、あまり自坊の手伝いをしたことがなく、読経などに不安があったからです。学寮では朝と夕に勤行があり、自坊を継ぐために必要な作法なども学べます。その中心となる場所が食堂です。食堂では勤行の他にも寮生大会という色々な決め事をすることがあります。また週末はみんなで夜遅くまで会話をしたり、定期試験前には寮生と一緒に課題に取り組めるので、成長を実感できる大好きな空間です。人と人が触れ合い、結び付けてくれる食堂という場所。ここで学び得た様々なことを、自坊でも生かしていきたいです。



自灯学寮寮生 小山 眞優(『真宗』2016年1月号掲載)

自灯学寮では紫明祭で「おにぎり」販売が定番となっています。先輩と寮母さんから受け継がれたその味は評価も高く、毎年、美味しいと評判です。前日は夜遅くまで準備をし、翌朝は4時から作業を始め、眼を擦りながら作業を進めるのですが、「今年も美味しい！」の言葉でその疲れも吹っ飛びました。学寮という共同体では人数が多いため様々な意見を聞けますが、その分、摩擦も起こりやすく模擬店を巡って喧嘩もしました。ですが、そのことで自分と違う意見にも耳を傾けることや、進んで仕事を楽しむことの大切さを学ぶことが出来ました。



貫練学寮寮生 今井 海嵐(『真宗』2016年2月号掲載)

私は学寮の中で自分の部屋が最も好きな場所です。基本的に一人好きの私は、携帯で音楽を流し本をゆっくり読みたいので、「相部屋」は避けたいと思っていました。でも、学寮生活の中で、「隣人」とは当番の関係やイベントなどで行動を共にする必要があります。しかし、気が付けば、お互いに悩みを相談できるまでの関係となり、今では単なる「隣人」ではなく、欠かせない友人になりました。襖を開ければ個人の時間も持てますが、それを開ければ「大事な場所」へと一変します。学寮の空間のおかげで、人と人が繋がる大切さを学ぶことが出来ました。



自灯学寮2014年度卒寮生 池守 弥子(『真宗』2016年3月号掲載)

卒寮の日、あれだけ嫌だった寮生活も終わりの日を迎えると、こんなにも寂しいものかと涙が溢れました。毎日、当たり前のように当番があって、勤行があって、掃除があって、早起きをして……。私のなかの大事なものが1つなくなってしまったような、そんな気がしました。たった1年間の生活ですが、卒業してもずっと友達、いや「家族」でいたいと思える関係を築くことが出来ました。寮生活中は本当に辛く大変で、途中で逃げ出したくもなかったけれど、それ以上に自分を成長させ、大切な事に気づかせてくれる場所です。「出逢いに感謝自灯愛」。



貫練学寮寮生 衣更着 暁(『真宗』2016年4月号掲載)

学寮生活で最も思い出がある場所は自習室です。ここは寮生の勉強部屋として活用され、そこで授業の予習・復習を行うなど、ほぼ一年の大半を過ごしました。そのせいもあって皆から「自習室の覇者」という称号をつけられました。テスト期間に入ると、自習室の利用者も必然的に増えるので、寮生同士で教えあいテストに臨んだのもいい思い出です。寮生活は大変つらいものでしたが、そのなかで艱難辛苦を共にし、協力しあっていくことで、仲間意識が芽生えていきました。「自習室の覇者」として過ごした時間は、形容しがたい大切なものです。

